

山下御門内仮病院

黒澤嘉幸

一、はじめに

陸軍衛生制度史⁽¹⁾によると、明治元年十月一日山下門内に開設された兵隊仮病院はわが陸軍病院のはじまりであつて、陸軍衛生部の芽生えとみなすべきものである。しかし、仮病院の名のとおり一時、間にあわせの設備だったので、その職制や業務の状況を示すものは何も存在していない。ただ、明治元年十月一日に兵隊仮病院を置き、同五年十月二十三日に陸軍第二仮病院と改称し、同六年一月十四日患者を本病院に移して閉鎖したという記録のみが明らかであると記述されている。

この仮病院が存在していたという明治元年から明治六年にかけては、宮城をとりかこむ大手町、丸の内、有楽町、日比谷公園、霞が関附近に、陸軍の諸機関、歩騎砲工の諸兵屯所が次々に整備されていった。⁽²⁾

仮病院はこのような地域内に存在したわけであるから、当時、重要な医療機関であつたと考えられるのである。それゆえ、まず仮病院の所在地、その変遷状況について研究を行った。

二、病院の変遷

(一) 兵隊仮病院

戊辰戦争が始まって多くの傷者が発生すると、官軍はその傷者を後送して横浜病院、さらに東京神田和泉町の医学校病院に収容した。

しかし医学校病院は明治元年九月から東京の行政をつかさどる鎮将府の所掌となったので、戊辰戦争が終局に近づき、傷者が減つてくると医学校病院に対する軍事上の要求が減り、東京府民の医療需要が増加してきたものと思われる。このことは明治元年十月から十一月にかけて、医学校病院の所管官庁が東京府から軍務官に、さらに東京府にと移り変わったことから推察することができる。

一方、官軍自体も平時態勢に入り、江戸城の外堀内に諸兵を駐屯させはじめたので、医療の需要がふえ、前述の事情もからんで自前の軍病院が必要となったのに相違ない。兵隊仮病院が設置されたのは、このような時期の明治元年十月一日だったのである。

(二) 山下御門内とは

山下御門⁽⁶⁾ 江戸城の内堀、外堀に架る橋には、人の出入を見張るため立派な門が城側に附設されていた。山下御門は外堀にかかる山下橋に設けられた門で数寄屋橋御門と幸橋御門の間にあった。現在の銀座みゆき通りと帝国ホテル裏側の高速道路とが交差するあたりである。

山下御門内 山下御門内とは外堀の城側地域(くるわ内)のうち、山下御門の附近をいう。

明治四年東京府は行政の基盤となる新しい区割りを制定した。このうち、第二大区第一小区と呼ばれた区画は江戸時代外桜田といわれた地域で、外桜田町、西日比谷町、霞が関町、裏霞が関町、内山下町一丁目、同二丁目、内幸町一丁目、同二丁目、三年町を含んでいる。⁽⁷⁾

これらの町名のうち、山下御門に近い町名は内山下町なので、当地域を対象にして山下御門内仮病院の存在の有無を

調査することにした。

(三) 軍務官治療所

明治元年十二月十三日、政府は軍務官に対し、病院の充実整備は容易でないから、しばらくの間病院を軍務官治療所と称しなさいと指示⁽⁸⁾している。この指示が実行されたことは、明治二年八月八日京都治療所を廃するという達⁽⁹⁾からみても明らかである。

山下御門内仮病院が軍務官治療所と称した確率はきわめて高い。

(四) 兵部省治療所

明治四年六月兵部省は日比谷の陸軍操練所を拡張するため、附近にある武家屋敷を兵部省に引き渡してもらいたい旨、仲介役の東京府に申し入れた⁽¹⁰⁾。その申し入れ文書の別紙略図⁽¹¹⁾に兵部省治療所が載っていたのである。

別紙略図 この略図は明治四年東京府が制定した区画のうち、第二大区第一小区に該当する地域（現在の日比谷公園、霞が関二丁目、内幸町二丁目、新橋一丁目、内幸町一丁目にあたる⁽¹²⁾）を筆図で描いたもので、軍用施設の陸軍操練所、兵部省治療所、東京府の施設名、大名屋敷の藩名などが正確に書き入れられている。

注目されるのは、兵部省治療所が載っていること、他の軍衛生機関は載っていないこと、他の当時の地図と比較した時、この略図の精度は高いものであること、略図の第二大区第一小区に該当する地域内には省略の空白部がないこと等であった。

兵部省治療所 政府は明治二年七月八日に軍務官を廃止⁽¹³⁾し兵部省を置いたので、軍務官治療所は兵部省治療所と呼称されるようになったものと思われる。そのことは、明治三年二月九日政府が兵部省の組織を改正⁽¹⁴⁾して海軍掛、陸軍掛を設け、陸軍掛の所管に治療所を置いたという記録からもうかがい知ることができる。

佐伯理二郎氏はそれについて、兵部省の一所管として海軍、陸軍の医務があり、本部は兵隊仮病院に置かれ、傷病者

はすべてここに入れたとしている。⁽¹⁵⁾

兵部省治療所の位置 略図に記載された兵部省治療所の位置を調べてみると、それは第二大区第一小区の内山下町二丁目⁽¹⁶⁾である。兵部省治療所の位置は山下御門内という条件に対しきわめて有力な候補であると判断できるのである。

この位置を当時の地図と比較してみると、万延元年(千八百六十年)の江戸図⁽¹⁷⁾では、その場所は朽木近江となっている。また、明治二年の江戸図⁽¹⁸⁾では松平ツシヨとなっていた。

朽木近江は福知山の藩主であるが、福知山市の御好意により、朽木家の上屋敷は外桜田屋敷と呼ばれ、現在の日比谷公園にあったということがわかった。

現在の内堀通りの霞門から日比谷公園に入り、とりつきの日本庭園の大きな池の東南部の森が外桜田上屋敷の跡だという。

幕府はこの屋敷を文久元年朽木家から召し上げ、牧野備前守に下されたが、⁽²⁰⁾明治元年まで牧野家の上屋敷であったとしたら、明治元年牧野家は長岡で官軍に敵対していたので、官軍が仮病院の施設として取得するのは容易であったかも知れない。しかし、明治元年まで長岡藩の上屋敷であったかどうか確認できなかった。

また、明治二年地図の松平ツシヨもその実態が確認できなかった。

以上の調査から、山下御門内の兵隊仮病院を所管する兵部省が、自ら作製した略図に山下御門内仮病院を記載しなかったのはミスではなく、当時正式には仮病院を治療所と呼んでいたためであると推察した。

(四) 東京鎮台仮病院

明治四年十一月十五日東京鎮台仮病院は軍医寮に対し次の伺いをたてている。⁽²¹⁾

(1) 治療所患者取締のきよう導役として治療所に派遣され病兵の世話をしているものがあるが、病院では不要なので、その役を外し等外二等位の処遇で病兵の世話に専任させて宜しいか。

(2) 元治療所門番は門番兵と唱えてきたが今後門番と唱え、待遇も等外としたいが差支えないか。

この文書から考えると、兵部省治療所は兵部省の所管を離れ、新しく東京鎮台のれい下に入ったものと思われる。そのため東京鎮台仮病院というようになった。

その理由は、明治四年七月兵部省に軍医寮が置かれ、陸軍掛治療所担当が不用になったこと、軍医寮は半蔵門前に病院建設（明治四年十二月診療開始⁽²³⁾）を計画中であり、他に直轄病院を必要としなかったこと、明治四年八月二十日東京、大阪、鎮西、東北に鎮台をおいたことである⁽²⁴⁾。

鎮台を置くと諸兵が集るから鎮台病院を整備する必要性が強まるのは当然である。明治四年十月九日大阪軍事病院が大阪鎮台附属となったり⁽²⁵⁾、兵部省治療所が東京鎮台仮病院になったりしたのは同じ理由と思われるのである。

この移管の時期は明治四年八月から十一月のあいだと推定される。

(六) 陸軍第二仮病院

明治五年の夏、高知出身の親兵六番大隊から多数の脚気患者が発生した⁽²⁶⁾。その後脚気患者は各隊からも続々と発生したので、明治五年十月二十三日陸軍省は護国寺仮病院を陸軍第一仮病院、山下御門内仮病院を陸軍第二仮病院とあらため、脚気患者収容にあたらせた⁽²⁷⁾。

これは明治六年一月十四日の「昨年脚気病旺盛之節音羽町護国寺ヲ以テ第一仮病院ニ…」という記録からも⁽²⁸⁾二つの仮病院を臨時の脚気病院にしたことが推察できる。

護国寺は徳川家の手厚い保護をうけていた大寺で、『江戸名所図会』⁽²⁹⁾によると境内に西国三十三番の巡礼札所を模した堂宇が点在し、江戸有数の景勝地として知られていた。当時は転地保養を脚気治療の一つとしていたくらいなので、護国寺は環境、施設の規模とも脚気病院に適しているものと思われる。

一方、山下御門内仮病院は低地に建てられているものの、近辺は大名屋敷のみで密集した民家から離れて環境良好で

あった。また、当局が陸軍操練所用地用として附近の大名屋敷を取得しつつあったので、病舎を拡張することが可能という条件もあった。

このような点から、山下御門内仮病院が護国寺同様脚気病院に転用されたのに違いない。

明治六年一月十四日軍医寮は護国寺の陸軍第一仮病院を閉鎖する旨陸軍省に届け出をしているが、陸軍第二仮病院については触れていない。当時の脚気事情から、恐らく病院の脚気患者収容機能を部内に保持させていたものと推測されるのである。

(七) 教導団病舎

明治七年発行の地図⁽³²⁾を見ると教導団病舎が載っている。その面積は大変大きく前述した内山下町二丁目全域を占めている。当然、兵部省治療所の敷地をも含んでいるのである。そこで教導団病舎と兵部省治療所との関係を検討することにした。

教導団 教導団とは陸軍の下士官を養成する隊で、当初は教導隊と呼ばれていたが、明治四年十二月八日大阪から東京に移転し、教導団と改めた。⁽³³⁾ 明治六年に陸軍省の直轄となっている。

本部は桜田門外、現在の警視庁所在地で、その近辺に生徒教導用の歩兵、砲兵等の大隊が配置されていた。

教導団病舎 陸軍衛生制度史⁽³⁴⁾によると教導団病舎は麹町区霞が関に在団していた時代にあったもので、団附医官又は軍医部の名のもとに軍医正以下の職員が配置され、おのずから他の屯営軽病室とは趣を異にしていたとある。

しかし、教導団の規模はまだ小さかったので、内山下町二丁目全域を占める程の病舎を必要とするとは考えられなかった。そこで陸軍衛生制度史による他の屯営軽病室とは趣を異にするという点を検討した。

明治六年九月十四日二等軍医正名倉知文が教導団付となった。⁽³⁵⁾ 彼は戊辰戦争の時幕府方についた松本良順に従い、会津におもむいて会津藩の傷者の治療にあたった医師で、良順の信頼の厚い人物であった。⁽³⁶⁾

彼は明治十二年に脚氣病の翻譯書を出版した⁽³⁷⁾。脚氣の本の出版は当時の風潮とはいうものの、彼の出版はおのれの職務との関係が大きかったのではないだろうか。

教導団病舎は山下御門内仮病院の敷地を含み、さらに大きい面積を有していたこと、名倉二等軍医正の勤務と脚氣書出版から、この病舎は脚氣病院を管理していたと考えたのである。

(八) 本病院

陸軍は松本良順の建議⁽³⁸⁾にもとづき、麴町元山王田原邸に陸軍病院を設立し、明治四年十二月二日から患者を入院させた⁽³⁹⁾。しかし庁舎や附属建物、病棟五棟等は明治六年八月一日本病院に引き渡されているので、本格的施設はこの頃から整備されていったものようである。

この陸軍病院ははじめ本病院と呼ばれ、陸軍制度の改革の都度名称を変更した。しかし創設時代から昭和二十年の終戦まで、陸軍の中央基幹病院の位置を失うことがなかった。

この本病院と兵隊仮病院との関係について、東京第一衛戍病院沿革史は「明治元年十月一日軍は兵隊仮病院を山下門内に設けたという。これはおもうに陸軍病院の創設であつて東京第一衛戍病院の前身である」と記し、兵隊仮病院の地位を暗示している。なお、東京第一衛戍病院は本病院の後の名称である。

三、考 察

山下御門内仮病院の足跡を追ってゆくと、軍務官治療所、兵部省治療所、東京鎮台仮病院、陸軍第二仮病院、教導団病舎、本病院などが、山下御門内仮病院に関係ある機関として浮び上つてきた。これらに対する調査結果を要約するつぎのとおりである。

(一) 戊辰戦争中、軍は医学校病院を軍事病院とし、戦傷兵収容の病院に使用してきた。

しかし戦争が終末に近づくにつれ、医学校病院に対する東京府民の医療需要が次第に強くなっていった。このため、軍は傷兵または平時病兵を入院させる自前の中央病院が必要になってきたのである。これが山下御門内に兵隊仮病院を設けた動機である。

(二) 明治元年政府の指示により、この兵隊仮病院は軍務官治療所と呼ばれるようになった。

(三) 明治二年に軍務官が兵部省に改められ、軍務官治療所は兵部省治療所になった。

兵部省の資料によれば、兵部省治療所は山下御門内にあり、かつそのあたりに軍病院が存在しないことから、この治療所が山下御門内仮病院であると判断した。

(四) 兵部省治療所の地積と朽木家の元上屋敷の地積は同じである。治療所の規模の大きさをおしはかることができる。

(五) 明治四年兵部省に軍医寮が置かれ、本病院の建設計画が進んだので、兵部省治療所は兵部省直轄から東京鎮台れい下になり、東京鎮台仮病院と呼ばれるようになった。

(六) 明治五年脚気患者の多発にともない、仮病院は陸軍第二仮病院と改称され、脚気患者收容病院となった。

(七) 脚気患者收容病院となった山下御門内仮病院は教導団病舎の管理下に入った。

(八) 明治六年陸軍は新しく本病院を建設し陸軍の基幹病院としたが、それは山下御門内仮病院の跡をつぐものであった。

これらの項目一つ一つでは確定できないが、連結してみると夫々つながりを持っていることが確認できる。

以上の点から、明治元年十月一日山下御門内に置かれた兵隊仮病院とは、通常山下御門内仮病院と呼ばれた軍の基幹病院であった。

新政府樹立直後は、兵制がしばしば改められたので、病院もその名称を軍務官治療所、兵部省治療所、東京鎮台仮病院、陸軍第二仮病院とあわただしく変えていった。

この病院は内山下町二丁目の朽木家の元上屋敷に置かれたもので現在の日比谷公園の中である。したがって規模も可成り大きい病院であったと思われる。

山下御門内仮病院は本病院にその任務をバトンタッチするまで、軍の基幹病院としてその医療を支え続けたのである。

四、結 び

山下御門内仮病院は明治元年十月一日に開設され、陸軍草創期の基幹病院であったといわれているが、この病院の実態を示す文書が存在せず「幻の病院」とされていた。

今回山下御門内に兵部省治療所が存在していたことを示す兵部省の略図を見出したので、これを中心に関係資料を分析した結果、山下御門内仮病院は現在の日比谷公園内に置かれていたこと、その施設は朽木兵部の元上屋敷であったこと、陸軍草創期の基幹病院でその名称を再三変更していたことを確認した。

文 献

- (1) 陸軍軍医団『陸軍衛生制度史』一一頁、小寺昌、東京、大正二年
- (2) 『千代田区史 中巻』一七五〜一八五頁、千代田区役所、東京、昭和三五年
- (3) 内閣記録局『法規分類大全 第四八巻』六四頁、原書房、東京、昭和五二年
- (4) 前掲文献(3)、六四頁
- (5) 前掲文献(3)、六五頁
- (6) 岸井良衛『江戸町づくし稿 上』三四〜三五頁、青蛙房、東京、昭和五〇年
- (7) 前掲文献(2)、一四六〜一五三頁
- (8) 前掲文献(3)、六六頁

- (9) 前掲文献(3)、六七頁
- (10) 東京都公文書館『明治初年の武家地処理問題』
- (11) 前掲文献(10)、一七六～一七七頁
- (12) 『東京二三区詳細図』四八頁、昭文社、東京、昭和六三年
- (13) 『陸軍省沿革史』四一頁、陸軍省、東京、明治三八年
- (14) 内閣記録局『法規分類大全 第四五卷』三四六頁、原書房、東京、昭和五二年
- (15) 佐伯理一郎『日本海軍軍医制度の創始者石神豊民氏に就て』『医譚』第三号、一～二頁、昭和十三年
- (16) 松浦宏『東京第二大区一二四小区』東京書肆、東京、明治七年
- (17) 高井蘭山『江戸図』出雲寺萬次郎、東京、万延元年
- (18) 『東京絵図』吉田文三郎、東京、明治二年
- (19) 福知山市史編さん委員会『福知山市史第三卷』四二八頁、福知山市役所、京都、昭和五九年
- (20) 前掲文献(19)、四二九頁
- (21) 前掲文献(3)、一〇〇頁
- (22) 前掲文献(13)、五七頁
- (23) 前掲文献(3)、七〇頁
- (24) 前掲文献(13)、六六頁
- (25) 前掲文献(3)、七〇頁
- (26) 前掲文献(1)、附録一頁
- (27) 前掲文献(3)、七二頁
- (28) 前掲文献(3)、七二頁
- (29) 『江戸名所図会 四卷』一九六～二〇七頁、新典社、東京、昭和五九年
- (30) 前掲文献(18)

- (31) 前掲文献(3)、七二頁
- (32) 前掲文献(16)
- (33) 前掲文献(13)、七〇頁
- (34) 前掲文献(1)、二四九頁
- (35) 『陸軍省日誌 四五号』陸軍省、東京、明治六年
- (36) 鈴木要吾『蘭疇の生涯』一三六頁、東京医事新誌局、東京、昭和八年
- (37) 前掲文献(1)、三頁
- (38) 前掲文献(3)、二〜四頁
- (39) 前掲文献(3)、七〇頁
- (40) 『陸軍省日誌 三七号』陸軍省、東京、明治六年
- (41) 『東京第一衛戍病院沿革略史』一頁、東京第一衛戍病院、東京、大正二年

(所沢市)

The Temporary Hospital within the Yamashita Gate

by Yoshiyuki KUROSAWA

An army temporary hospital was established within the Yamashita Gate on October 1 in the first year of Meiji.

Although this hospital has been said to have been the first army hospital, its function and situation of service have been unclear.

I studied to determine its actual site and changes in its status.

I confirmed the following facts as the result.

- (1) The site of this hospital was in Hibiya Park.
- (2) Its structure was the daimyo's mansion at first.
- (3) The popular name of this hospital was "the Temporary Hospital within the Yamashita Gate".
- (4) Its formal name was changed, in turn from the Gunmukan Dispensary to the Dispensary of the Hyobu Ministry, the Temporary Hospital of the Tokyo Garrison, and the Army Second Temporary Hospital.
- (5) This hospital was the army central hospital in the early years of Meiji, until the status was transferred to the Honbyoin (New Army Central Hospital).